

# 思いをもって豊かに表現する力を育む音楽科の授業をめざして

—— 音楽の諸要素の感受を思いにつなげる指導の工夫 ——

音楽科研究会議

研究員 毛利 友紀（川崎市立末長小学校）

篠塚 真理子（川崎市立大師小学校）

神谷 由理（川崎市立麻生中学校）

篠木 彩友美（川崎市立橋中学校）

指導主事 仲野 雅子

## I 主題設定の理由

平成20年度に実施された国立教育政策研究所による「特定の課題に関する調査」の結果によれば、約8割の児童生徒（調査対象は小6、中3）が音楽の学習に対して肯定的な意識を持っている。また、歌唱の実技においては、平易な二部合唱曲の一部分を8小節間、範唱を数回聴いてから歌唱する課題に対して、中学校で約6割の生徒がおおむね正しい音程で歌い、約8割の生徒がおおむね正しいリズムで歌っている。しかし、自分なりに歌で表現したいことを考え、それを生かして歌っている生徒の数は約3割にとどまった。

ここで注目すべき点は、これら3割の生徒には、音楽を形づくっている要素を知覚・感受することや音楽表現の工夫を明確に言葉で表すことができるという傾向が見られることである。

従前の表現領域の授業では、ややもすると音程やリズムを正しく表現することや美しい音色（発声）で演奏することなど、技能の指導に重点が置かれがちであった。しかし、生涯にわたって音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるという意味においては、一人一人の児童生徒が、音楽を形づくっている要素を手掛かりとしながら、どのように表現するかについて、思いや意図をもてるような授業の展開が大切である。

本研究会議では、児童生徒が思いや意図をもって豊かに音楽表現するために、指導の手立てをどのように工夫し、併せて、その高まりをどのように評価していくのかを、授業実践を通して考えていくことが音楽科の授業改善に資すると考え、本主題を設定した。

## II 研究の内容

小学校・中学校のそれぞれにおいて、表現領域の指導と学習評価の在り方について、児童生徒が主体的に活動し、さらに思いや意図をふくらませそれを音楽表現として実現していく過程を考え、授業改善に取り組んだ。研究の成果は、授業レベルで活用できるような事例集としてまとめ、市内小・中学校に配付する。また、研究員が中心となって、川崎市立小学校音楽教育研究会、川崎市立中学校教育研究会音楽科部会の学習会等で発信していくものとする。

### 1 歌唱・器楽の分野における「思い」

#### （1）感受に基づく思いを表現につなぐための工夫…ワークシート、意見交換、技能との関わり

思いや意図をもって表現するには、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みに気付き、それらの働きが生み出す雰囲気を感じることが必要である。そこで、気付きを引き出すための発問や、知覚・感受、表現の工夫の一連の過程が可視化できるようなワークシートを工夫した。また、思いや意図に基づく表現につなげるために、表現を工夫する中で演奏を試しながら意見交換するなどの学び合いの場面を設定した。一人一人の思いを音で表したり言語化したりすることは、思いや意図を全体で分かち合う有

効な手立てとなり、そのことによって、音楽表現は、より妥当性のある豊かなものへと高まっていくと考えたからである。

さらに、思いが思いにとどまることなくそれらを実現しようとする中で技能の高まりにつながっていく様子を見取る工夫をした。意欲のみならず思いや意図まで十分に高まっているにもかかわらず、児童生徒の表現が表層的、画一的なときがあるが、この原因には、具体的な身体の使い方や基本的な奏法が身に付いていないことが考えられる場合がある。したがって、技能の習得状況について、短時間ですべての児童生徒について効果的に確認する工夫も大切であると考えたからである。

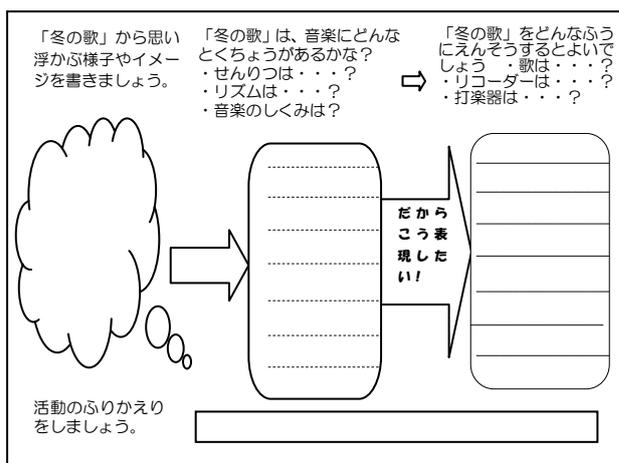
これらの指導の手立てや学習評価の工夫をすることで、子どもたちは今まで気付かなかったことに気付き、それらを表現したいという思いが高まり、より豊かな表現につながるものと考え、授業に臨んだ。

## (2) 授業実践 題材「旋律の特ちょうを感じ取ろう」A小学校4年

旋律の特徴を感じ取らせるために、題材の第一次で特徴の異なる楽曲を聴き比べ、雰囲気の違いを感じ取らせる鑑賞の活動を設定した。児童自身が「音の動き」「リズム」「速さ」「強さ」などの諸要素に気付いて、表現の活動においてもそれらを意識しながら思いや意図をもって豊かに表現していけるような授業展開とするためである。

次に、部分二部合唱『冬の歌』の歌唱とリコーダーによる副次的な旋律、打楽器のリズム伴奏を合わせていく表現活動を展開する。ここでは、ワークシート

を活用することで、児童一人一人の思いや意図を丁寧に見取ることとした。ワークシートは「旋律の特徴を感じ取る」ための手立てとして用い、そこから音楽の諸要素についての気付きへとつなげられるよう発問を工夫した。



『冬の歌』の音楽の特徴、音楽の仕組みを感じ取り、どんなふうに演奏したいかの記述

○ (児童 a) の記述 「スキップしている感じだから、スタッカートをつけて歌う。『ズンズン…』は4回でひとまとまりだから、1拍目にはっきりとアクセントをつけた感じにして元気に歌いたい。」	○ (児童 b) の記述 「テンポがとても速いから、音を短く切って歌うようにしたい。『ラララー』のところはアルトとソプラノがあるから、アルトにつられないように歌いたい。」
○ (児童 a) の記述(まとめ) 「同じ歌なのに、強弱、歌い方を変えることで、まるで違う歌のように雰囲気が変わってびっくりした。これからも表現のポイントに気を付けて歌おうと思う。」	○ (児童 b) の記述(まとめ) 「『冬の歌』は強弱 (f や p) を変えることで変わることが分かった」
(児童 a) は、旋律の特徴や楽曲全体の雰囲気を感知取り、その曲らしさを出して表現するため、自分なりにフレーズ感やアクセントを意識して演奏していたことが分かる。したがって、この場面での「音楽表現の創意工夫」の観点では、2つの記述に学習の質の高まりが見られ、十分満足できる状況 (A) と判断した。	(児童 b) は、表現の工夫のポイントである「はずむ感じで演奏すること」や「強弱」を変えることを意識して演奏していたことが分かり、おおむね満足できる状況 (B) と判断した。

続いて、自分たちの演奏を客観的に聴き合い、思いを実際の演奏につなげるときの課題を明らかにして技能の高まりに迫る活動を展開した。例えば「楽しい音楽にしたい」という思いや、「細かいリズムだから、軽くはずんだ演奏にしたい」という思いは、言語や動作、音でも表される。ここでは、子どもと教師の応答だけでなく、子ども同士による意見交換が活性化されるような場を設定し、発言内容やワー

クシートの記述内容を学習評価のポイントとした。『冬の歌』は、雪の道を軽やかにそりが走る様子を表現したい。そのために、リコーダーの旋律は短く切って演奏してみようと思う。」などと表現の意図を明確に語れるようになった。

この後、実際に演奏しながら表現を工夫する活動に移るが、この中で、一人一人に1フレーズずつリコーダーを演奏させ（リレー奏）、技能の習得状況を確認した。教師が一人一人の技能を把握できただけでなく、児童にも互いの演奏を聴き合って、より自分の思いに近い演奏をめざそうとする姿が見られた。

『冬の歌』の演奏を聴き合い、表現の工夫について意見交換する場面  
 (児童 c) の部分は細かいリズムが多いから楽しくはずむように歌おうよ。  
 (児童 d) スタッカートかな？  
 (児童 c) スタッカート？やり過ぎじゃないかな？  
 (児童 e) でも、ちょっとやってみようよ。  
 ≪一度演奏してみる≫  
 (児童 c) 歌はよくなったけど、リコーダーが弾みすぎて「ピーピー」言ってるよ。  
 教師 リコーダーはむずかしいね。  
 でも、じゃあどうやって演奏したらいいかな？  
 (児童 f) タンギングをしっかりとするといいのかな？  
 (児童 d) はずむ感じって、こんな感じかな・・・？  
 ソツソツシー ソツソツシー・・・(口ずさむ)

※「音楽表現の創意工夫」の観点で、十分満足できると判断するもとなる発言の例  
 (児童 c、d)

### (3) 授業実践 題材「曲想を味わい、思いを表現して歌おう」B中学校2年

歌詞の内容や曲想を自らの思いや意図をもとに表現する活動として、混声三部合唱曲『桜の下で』から「つよく やさしく おおきくなりたい」という歌詞の部分を取り上げた。

『つよく』という歌詞なのに、なぜ“*mf*”という強弱記号がついているのか。」という発問を範唱の聴取後にすると、「力が強いということではなく、精神的に強いという感じ」「涙を受けとめられる強さ」などの意見が出た。そこで、学級をパートや前・後列グループに分けて生徒同士で聴き合いをし、さらに意見交換を3～4人の少人数で行った。ここでは、具体的にどのような工夫をしていくかを考えるときのヒントとして、キーワード（「曲の雰囲気」「イメージ」「歌手の気持ち」「強弱」「発声」「子音の発音」）を提示した。

ワークシートでは、感受したことから表現の工夫への結び付きを考える中で思いがふくらむよう、工夫をした。

#### 『桜の下で』の演奏を聴き合い、具体的な表現の工夫について意見交換する場面

生徒 g) 気持ちをこめて歌えばいいと思う。  
 生徒 h) “精神的に強い” 感じを表したいから、気持ちを強く持って歌おうよ。  
 (実際に歌ってみる)  
 生徒 i) あまり変わらなかったなあ。“つよく”という歌詞を聴いている人に伝えたいけれど、音が大きくなってしまおうと雰囲気が変わってしまうから、弱いけれどはつきり発音するようにしたらいいんじゃない？  
 生徒 j) 発音かあ。じゃあ、言葉をはつきり伝えるように、「t」を意識して発音しよう。息を吸うところから合わせていこうよ。

※おおむね満足できる状況 (B) と判断した例 (生徒 g、h)

※十分満足できる状況 (A) と判断した例 (生徒 i、j)

#### 感受したことを表現するために具体的にどのような工夫をするかの記述

生徒 k: やさしく訴えかけるような気持ちで歌い、男声パートは女声パートよりも声が大きくなりやすいようにする。歌詞の意味を考えて、言葉を伝えるために、子音の発音をしっかりする。

生徒 l: “つよく” の部分は、どなる声ではなくて、やさしい声で歌う。少し大きめに子音の発音に気をつけて歌う。

生徒 m: “つよく やさしく” のところを、ふんわり歌う。心をこめてしっかり歌う。“おおきくなりたい” の前の休符で大きく息を吸い、フォルテは自信を持って歌う。」

歌詞の心情を表すために、子音を意識することや強弱に気をつけることの他に、男女の声のバランスや掛け合いについても言及している生徒を、十分満足できる状況 (A) と判断した。

子音の発音や強弱など一つ以上の工夫について記入している生徒を、おおむね満足できる状況 (B) と判断した。

「つよく、やさしく」の部分は、女声パートが先行し男声パートが追いかける、掛け合いの構造になっている。生徒たちの何人かは、話し合いの中で、強弱記号に示された作曲者の意図に加え、このようなテクスチャの上での作曲者の仕掛けに気付くことができた。

授業の最後には、以上のようなグループの意見交換の内容を学級全体で共有してから様々な歌い方を試みた。この中では、続く「おおきくなりたい」の部分が、一転してユニゾンによってフォルテで歌われることの音楽的な意味付けを感じ取りながら、最もふさわしい表現に近づけるよう繰り返し部分練習に取り組むことができた。その結果、技能面でも、「おおきくなりたい」の直前のブレスは、多くの生徒が身体全体を使って瞬間的に深く吸えるようになり、表現に決然とした表情が加わり、深みが増した。

## 2 音楽づくり・創作の分野における「思い」

### (1) 感受に基づく思いを表現につなぐための工夫…発想を引き出すルール、試行錯誤を支える楽器

「音楽づくり」「創作」の活動は、「音」を「音楽」に構成していくための手掛かりが十分でないと、意欲があっても活動が円滑に展開していかないという状況になりがちである。例えば、「朝の爽やかな感じの曲をつくりたい。」というようなイメージだけでは、「さあ、つくってみましょう。」といわれても、子どもたちは途方に暮れてしまうことになる。そこには、「どのように音を音楽にしていけば爽やかな感じになるのか。」「音楽の曲想というものは、音楽を形づくっているどのような要素や音楽の仕組みから醸し出されるものなのか。」という、知覚・感受の力が必要とされる。そこで、このような音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みに基づいた「音楽づくり・創作の発想を引き出すためのルール」を適切に示すことが思いを高めるために重要であると考え、その在り方を考えた。

また、考えた音楽を実際に音にして確かめながら他者の作品も聴き、試行錯誤する中で、表現が豊かさを増し、そのことによって作品への思いも深まると考え、活動には楽器を用いることとした。

### (2) 授業実践 題材「曲のまとまりに気をつけて 音楽を味わおう」C小学校5年

AA'の構成による8小節の旋律のうち、第3・4小節目と第7・8小節目の旋律をつくるという題材である。本題材の学習内容は、学習指導要領のA表現(3)音楽づくり 事項(イ)「音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、見通しをもって音楽をつくること。」に基づいている。

授業では、まず、4小節単位の2つのフレーズが「反復・変化」を生かした構成になっているという音楽の仕組みを聴き取れているか確認した。この学習には、本題材の直前に配置した「和音の美しさを味わおう」という題材で扱った『静かにねむれ』の前半8小節を用いた。和音構成音となる副旋律を重ねながら繰り返し歌った楽曲であったため、楽譜で音楽の仕組みを視覚的に確認しながら、容易に気付かせることができた。

次に、実際に音を選び音楽に構成していくが、リズムパターンとフレーズの最後の音を限定し、既習事項の和声進行を手掛かりにするよう示した。

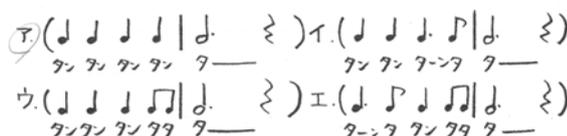
旋律は、鍵盤ハーモニカで実際に演奏して、音のつながり方や旋律の方向性が自分の思いや意図の生かされたものになるように練っていくことを投げかけた。

記譜は、音の高低を可視化させるためにも、最初は階名をカタカナでメモしてもよいが最終的には五線譜に記入させるようにした。さらに、作品の中間発表の場面では、教師が和音伴奏を付けて和音の響きを意識しやすいようにするとともに、視覚的にも旋律をとらえられるよう作品を拡大楽譜で示した。すると、2フレーズ目の変化のさせ方で作品全体の表現が一段と豊かになることに気づき、「最後

**仕組み1**：同じ旋律をくり返す(反復)と、**まとまり**が感じられる。  
**仕組み2**：フレーズ(最初の4小節)の最後を「**つづく感じ**」にすると、次のフレーズ(4小節)への**つながり**が生まれ、そのフレーズ(後半の4小節)の最後を「**終わる感じ**」にすると、8小節の**まとまり**が感じられる。

#### 【旋律づくりのルール】

①リズムは、提示されたパターンから選ぶ。



②音は、次のルールに従って選ぶ。

- ・「つづく感じ」の最後の音は「ソ」か「シ」か「レ」の音から選ぶ。
- ・「終わる感じ」の最後の音は「ド」(一点ハか、二点ハ)にする。

は盛り上がるようにしたい。だから、高い音をつかってみました。」など、音楽づくりへの思いや意図がさらに明確に表現できる児童が増えた。

2時間の授業で、ほとんどの児童が選んだリズムパターンに音を当てはめることができ（「音楽表現の技能」の観点の創作に関するB規準）、振り返りには、「音（符）選びを慎重にやらなくてはダメだということ！中間発表から（音を）変えた理由は、リズムに合う音がこれだ！と思ったから。」「音はリズムと合わせると大変だった。リズムがよくても音が変だったりするから。」「とても楽しかった。有名な曲を作った人の気持ちがわかりました。」などの記述が見られた。

**【作品】** 旋律づくりのワークシート

**「後半は盛り上げたい。」と曲全体の構成について思いを述べ、「音域に変化を付ける」という音楽的な効果をねらった意図も記入されている。学習が高まっていった経過がワークシートから読み取れる。したがって、「音楽表現の創意工夫」の観点から、創作に関して十分満足できる状況(A)と判断した。**

**【工夫したところ】**  
最初はとても高い音でどちらも変わらなかったのが、最初（3・4小節目）を低くして、最後を高くしてみました。やっぱり最後の方に盛り上がる感じにしたかったので、直しました。

**【感想】**  
初めての旋律づくりだったけど、楽しかったです。

### （3）授業実践 題材「百人一首の旋律をつくろう」D中学校2年

短歌を平調子の旋律で歌うために箏を用いて旋律を創作するという題材である。本題材の学習内容は、学習指導要領のA表現（3）音楽づくり 事項（ア）「言葉や音階などの特徴を生かし、表現を工夫して旋律をつくること」に基づいている。D中学校では、百人一首に日頃から親しんでいる環境があり、多くの生徒が歌の意味内容まで理解しているため創作のイメージをもちやすいと考えた。

授業では、まず、2～3人に1面の箏で、1年次に学習した『さくらさくら』や『数え唄』を演奏し、基本奏法や縦書き譜の読み方を確認しながら平調子の響きを十分に味わわせた。

この後、「百人一首の中で、歌ってみたい一首を選んで、箏で音を出しながら旋律をつくってみよう。」と投げかけた。すると、「平調子の響きは、春や夏の歌というより、秋の歌って感じだ。」「切ない失恋の歌のほうが合うかもしれない。」など、平調子の音階の特徴を的確にとらえていると判断できる発言が認められた。

次に実際に音を選び音楽に構成していく。

ここでは、まず、平調子の旋律の特徴を知覚して

いることを実際に音にしながらか確認した。この仕組みがそのまま創作のルールになる。ワークシートには、言葉の抑揚を確認するための例を示し、自分の選んだ歌も、まず、抑揚を確認してみるように促した。このとき、いきなり31文字分を音楽に構成するのではなく、2音（五→六、八→七）や3音（六→七→八、七→八→九、八→九→八）の音型を言葉の抑揚に合わせて考え、それをつなげていくように例示したところ、すぐに創作に取り組むことができた。

リズムについては、既習曲『荒城の月』を例に出してシラブルと音符の関係に気付かせ、「おくやまに」であれば、などのリズムの音符一つ一つに対応させる方法でつくればよいことを確認した。さらに、箏は歌と同じ旋律を弾けばよいが、箏独特の奏法を一回は使うというルールを加え、箏の音色の醸し出す雰囲気を生かして思

- 仕組み1：順次進行でフレーズを構成し、音域を広げすぎないと歌いやすい旋律になる。**
- 仕組み2：言葉の抑揚を生かすと歌いやすい旋律になる。**
- 仕組み3：平調子では、三・五・八・十のいずれかの弦で終わると終止感がもたせられる。**

- 【旋律づくりのルール】**
- ①順次進行でフレーズを構成し、音域を広げすぎない。
  - ②言葉の抑揚を生かす。例：秋「あゝき」
  - ③三・五・八・十のいずれかの弦で終わる。
  - ④箏は歌と同じ旋律を弾けばよいが、かき爪、合わせ爪、押し手、突き色、引き色のどれかの奏法を一回は使う。

いを込められるようにした。

旋律は、実際に箏で演奏し、確かめてはまた変更を加える。この試行錯誤を通じて「この歌の一番強い意味のところを一番高い音にしました。」とか、「上の句と下の句の間に時の流れを感じさせたいから間奏を入れた。」など音楽をつくっていくに当たったの思いや意図的な表現の工夫が充実したことが確認された。3時間の創作で、ほとんどの生徒が31文字をまとめた旋律にのせることができた（「音楽表現の技能」の観点の創作に関するB規準）。

どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもち、工夫として妥当な内容をワークシートに記入しており、作品からもそれが音楽的な妥当性をもって読み取れると判断されたもの（「音楽表現の創意工夫」の観点の創作に関するB規準）の例

<p>「イメージした情景」 うららかな春の日に桜の花が散っている、美しいようで、少し切ない情景が浮かびました。</p>	九は	〇	四ひ
	十な	十は	五さ
	十り	九ま	六か
	九ち	九う	六た
<p>「工夫したこと」 のどかな春の日に、ゆつたりとしたテンポの曲にしました。また、八分音符をところどころに入れ、花が散るような動きのある感じを出しました。</p>	十し	五ひ	
	斗が	六か	
	九ま	七り	
	十は	八の	
<p>「イメージした情景」 山里は冬になると雪がしんと降っている。他には何もなくて、静かで寂しい様子。</p>	七る	五や	
	七ー	七ー	七ま
	七ー	七ー	七ま
	七ー	七ー	七ま
<p>「工夫したこと」 寂しい感じ、静かな様子を出すために、のばす音符や休みをたくさん入れるようにした。</p>	〇〇	〇〇	六と
	〇〇	〇〇	六と
	〇〇	〇〇	六と
	〇〇	〇〇	六と

### Ⅲ 研究のまとめ

多くの学校で意欲的に合奏や合唱の活動に取り組む児童生徒の姿が見られてはいるが、それが本当に身に付けさせたい音楽の力に結び付いているのだろうかと思問するところから本研究はスタートした。音楽の諸要素や仕組みの知覚・感受に基づいた音楽表現への思いや意図を高めることが、学習の質の向上の鍵になるという視点から、指導と学習評価の在り方を模索した。

その結果、説明したり技能を教え込んだりする授業ではなく、児童生徒が自ら感じ取り、どうやって表現しようかと考える授業の在り方や、その感受や思考の適切な評価の仕方について、具体的な工夫の方法が明らかになってきた。子どもがその音楽に出会い、音楽表現への思いを膨らませていく過程を教師が意識することにより、今まで見てきた「上手に歌えた。」「旋律がつくれた。」といった表現の一番外側の姿だけでなく、「この子はどう表現しようとしているのか。」を見取ることができる。そして、そのことで、結果的に指導の質が高まり、子どもたちの思いが深まり、豊かな表現のための技能の向上にもつながったと実感している。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼を申し上げます。

#### 【参考文献】

国立劇場企画・編集 小島美子監修『日本の伝統芸能講座』淡交社

2008年

江田 司「鑑賞と関連付けた音楽づくりの授業」

「初等教育資料」東洋館出版社 平成23年9月号 58-61頁 2011年

#### 【指導助言者】

川崎市立小学校音楽教育研究会長（川崎市立末長小学校長）

金子やちよ

川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長（川崎市立白鳥中学校長）

伊藤 民子